長崎外国語大学
チャペル通信

編集・発行
長崎外国語大学
宗　教　部
〒851-2196
長崎県西彼杵郡
時津町元村郷1010－1
TEL 095(840)2000
FAX 095(840)2001

VIA VERITS VITA　「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネによる福音書 14章6節)

チャペルアワー奨励から

「総　和」

日本基督教団　長崎銀屋町教会　牧師　竹内款一

「キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。」

エフェソの信徒への手紙4章16節

この箇所は、キリストによって集められた者が「体」のようなものだと示されます。そして、その「体は様々な部分によって成り立ち、それぞれの部分が異なる働きを持っており、一つとして同じではない異なる者が、結ばれて共に働き、成長し育まれていくものだと示されます。

わたしたちの肉体について考えてみますと、実に調和を持っており、それによって見事に機能しているように見えます。すると、キリストによって集められた者達は、そのような調和を持っていると見ることができるかも知れません。

しかし、体は調和持っていられることが当然かと言えば、必ずしもそうではないことも、私たちは知ります。病気になることもあります。“しょうがい”を得ることもあります。あるいは、老いることを経験します。思うようにならないことも経験しうるのが、実際の体であります。

この聖書の言葉はエフェソの信徒への手紙に収録されていますが、この著者も実際に病を負うことがありました。思うようにならないことを経験してきたはずの人間でした。あるいは衰えることも経験した人間でした。それでも、自分たちは「成長し」「造り上げられてゆく」ものであると語ります。

つまり、この体とは、一見、調和を持っていて完全なるもののように感じますが、「成長過程」であり、どこまでも「造り上げられてゆくもの」であると主張しているのです。

わたしたちの世には、実に多種多様な、元々異なる背景を持った人が、集められています。決して同じではない人が、同じ空間や同じ時間を共有しています。世界はまさしくそうなのです。他者との違いを経験しつつ、その中でこそ「自分」というものを発見したり、再認識したり、自覚します。また、自分のみならず、他者の尊さを発見していきます。

一つ詩を紹介します。吉野弘という方の「生命は」という詩です。

生命は
自分自身だけでは完結できないように
つくられているらしい
花も
めしべとおしべが揃っているだけでは
不充分で
虫や風が訪れて
めしべとおしべを仲立ちする
生命は
その中に欠如を抱き
それを他者から満たしてもらうのだ

世界は多分
他者の総和
しかし
互いに
欠如を満たすなどとは
知りもせず
知らされもせず
ばらまかれている者同士
無関心でいられる間柄
ときに
うとましく思うことさえも許されている間柄
そのように
世界がゆるやかに構成されているのは
なぜ？

花が咲いている
すぐ近くまで
蛇(あぶ)の姿をした他者が
光をまとって飛んできている
私も あるとき
誰かのための蛇(あぶ)だったろう
あなたも　あるとき
私のための風だったかもしれない

緩やかに、「命を与えられている意味」を考えさせられる詩のように思います。人が他者と出会い、時に結ばれていく時、自分や他者の存在意義を伝えられる思いがいたします。あるいは、他者をうとましく思うことがあるような、ある種自由な感情を持つ私たちですが、それでも他者と生きることの意味を穏やかに教えられる思いがいたします。

人との出会いや人との結びつきは、自分だけでは造れるものではありません。必ず他者を必要とします。

私たちの命は欠如を抱くことがありますが、それ故にこそ他者と結び合わされることにおいて成長を必要とし、欠如を抱きながらも造り上げられてゆくものなのです。様々な背景や異なる個性を持つ一人一人の「総和」こそが掛け替えのない「体」なのです。

そして、今回の聖書の言葉からは、わたしたちは、「キリストによって結ばれた尊い体」であることが分かります。

キリスト教主義によって歩んできた長崎外国語大学でなされる尊い学びや研究、そして尊い交わりをかたち造るお一人お一人に、主イエス・キリストの祝福がありますよう、長崎銀屋町教会よりお祈りいたします。

(2012年6月20日)

緒方(おがた)純雄(すみお)先生のこと　―キリスト教教育者物語　こにし・てつろう

本学のほこりであるキリスト教教育者は、2013年に93歳になられる緒方純雄先生（同志社大学名誉教授）である。熊本出身の「肥後(ひご)もっこす」である先生は、敗戦の1945年に同志社大学神学科（旧制）を卒業され、翌年日本基督(キリスト)教団長崎馬町(うままち)教会に赴任された。そこで伝道師として主任の青山武雄(あおやまたけお)牧師（本学創立者）をたすけて伝道・牧会にはげむかたわら、同教会堂を利用してはじめられた本学の前身・長崎外国語学校で、講師兼宗教主任として1949年まで活躍された。

緒方先生は、神学的な大著をものされたわけではない。しかし先生の同志社時代のおしえ子には福井(ふくい)達雨(たつう)（知能におもい障害をもつ子どもの施設「止揚学園」リーダー）や、佐藤優(さとうまさる)（作家、元外務省主任分析官）といった、同志社神学部の「バンカラ」の伝統をうけつぐ「怪物」クリスチャンたちがいる。コリント教会のひとびとに、あなたたちこそがわたしの手紙であるといったパウロにならって、これらのおしえ子たちも緒方先生のかかれた「手紙」だとすれば、それはキリスト教教育者としての先生のおおきさをたしかにあらわすものであろう。

緒方先生が本学で教鞭をとられたのはわずか3年であったが、そのときのおしえ子たち（平均年齢は85歳超）が先生をかこんでいまも毎年長崎で同窓会をおこなっている。そんな緒方先生が草創期の本学のいしずえをきずいてくださったことを、おしえ子のはしくれであるわたしは光栄におもっている。

教会とわたし

合田政次（ごうだ まさじ）

「キリスト教との出合い」

さて、今日は私たち夫婦がどのような経過を経て洗礼を受けるに至ったのかという「キリスト教との出合い」について、お話させて頂こうと思います。

ヨハネによる福音書15章16節には「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」という聖句があります。私と妻が、そうです、私たちは二人一緒に、キリスト教へと導かれた訳ですが、それは、まさにその聖句どおりだったのではないでしょうか。

2011年の４月、一枚のはがきが我が家に届きました。それは、日本イエス・キリスト教団の時津にあります長崎めぐみ教会に４月から新たに牧師としてこられました高江洲伸子（たかえすのぶこ）先生からのものでした。

さて、家内は３月頃に、時津のスーパー・ジャスコ裏手の電柱に掲げられているめぐみ教会の案内を見つけたそうです。そして、どんな教会なんだろうと様子をうかがいに行ったそうです。

ところが、この時、後ろから声がかけられたのです。「どうぞ、どうぞ中へ」、そう声をかけてくださったのが、４月から新たに来られる予定の牧師先生だったのです。先生によりますと、その日は前任の牧師先生との引き継ぎで岡山から一日だけ長崎に来られ、そして、ちょっと散歩に外出され帰ってきたところに、教会の前にいる家内を見つけたということなのです。

わずか一日の滞在のその日、それもちょっと散歩に出たゆえに一瞬の出会いが生じたわけです。すべてが偶然かもしれませんが、「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」この聖句を身をもって感じます。神が私達のためにキリスト教への道を備えてくれたのでしょう。

そして、新年度の４月になったある日、私は、牧師先生からのはがきを見つけたのです。それは、「長崎に赴任してきましたので、教会に来られませんか」という案内でした。「こんなはがきが来てるけど、なに？」と家内に尋ねて、３月からのいきさつをその時初めて知りました。そして、なぜか「僕も一緒に行ってみようか」となったわけです。

その下地は、長崎外国語短大時代の３年間のチャペルにあったのだと思います。当時は短期大学で、私はその夜間部に通っていました。一日の仕事を終えて、それから、講義となるわけですが、火曜日は最初にチャペルの40分間がありました。讃美歌や先生方のお話に心地よい、心の安らぎを感じていたことが頭の隅に残っていたのでしょう。

そんなわけで４月から夫婦で長崎めぐみ教会の日曜礼拝に出席するようになりました。そして、半年後に洗礼を受けた次第です。半年後の洗礼が早いのか、遅いのかはわかりませんが、伝道の書３章11節には「神のなされることは皆その時にかなって美しい」とあります。私たちの受洗もきっと”その時“だったのだと理解しています。

振り返って、考えてみますと、家内が電柱にある教会の案内を見つけたこと、教会を訪ねたこと、牧師先生が長崎に来られたわずか一日だけのその日、その時お会いしたこと、そして４月のはがきを私が見つけたこと、二人で行ってみようかとなったこと、これらすべて偶然といえば偶然かもしれませんが、「あなたがたが私を選んだのではない。私があなた方を選んだのである」という聖句をひしひしと感じ、選ばれたことの喜びを感じながら、クリスチャンとしての日々を楽しく過ごしているこの頃です。

（長崎外国語短期大学 1978年卒業生
長崎大学水産学部教授
2012年11月28日 チャペルアワー奨励から）

みんなで クリスマス！

―「全学クリスマス礼拝 2012」のご報告―

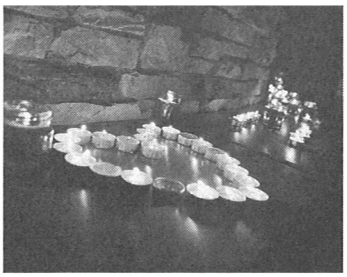
12月19日（水）午後４時30分から、恒例の「全学クリスマス礼拝」が大学411ホールでおこなわれ、約200名の学生・教職員が主イエス・キリストのご降誕をおいわいしました。

学院のもっともたいせつな行事のひとつであるクリスマスは、例年午後の授業を休講にしておこなわれます。ことしは第１部（礼拝）、第２部（コーラス）、第３部（パーティー）の３部構成でした。

第１部の礼拝では、川口香里さん、パク・テジュンさん、シン・センさん、ミシェル・ネイグルさんが学生代表としてそれぞれ日本語・韓国語・中国語・英語で聖書を朗読しました。また小西哲郎学院宗教主任からクリスマスのメッセージがかたられ、一同でクリスマス献金をささげました。この席上では26,534円がささげられました。この場をおかりして感謝をもってご報告いたします。オルガン奏楽は島田美子さんが担当しました。

第２部は現代英語学科２年の辛島千佳子さんが司会をつとめ、語学のクラスで編成された「聖歌隊」が英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語、中国語、韓国語、日本語で賛美歌、クリスマスソングをうたいました。コーラスの指導は、英語：サイモン・ハル先生、ドイツ語：クラウディア・マラ先生、フランス語：アガエス・ジュリアン先生、ラテン語：小西哲郎先生、中国語：郭楊先生、韓国語：佐々木正徳先生、日本語：酒井順一郎先生が担当しました。会場と一緒にうたったり、トーンチャイムをつかったり、いろいろなパーフォーマンスをとりいれたりと、さまざまな趣向をこらしたクラスもありました。

そのあと第３部のパーティーが、１階の学生ラウンジに場所をうつしておこなわれました。サークル・NEST（ネスト、代表：藤田勇樹）の学生たちが中心になってパーティー（クリスマス・キャンドルナイト）を企画・運営したことは、ことしのあたらしいこころみです。400個以上の手づくりのローソクをともし、くらい世におうまれになった、まことのひかりであられる主イエス・キリストのお誕生をおいわいしました。パーティーはサークル「jasmine＊」によるベリーダンスショー、プレゼント抽選会、ゲストの長崎大学アカペラ・サークル「はもねぴあ」のライブなどでもりあがり、約160名の参加者がたのしいときをすごしました。



オリジナル商品　長崎版 一筆箋

長崎の観光の思い出を伝えるおみやげとして、又、贈物に添えるメッセージカードとしてご利用下さい。

教会編
各6種類(封筒付)
定価
350円(税込)

観光地編
各5種類
定価
300円(税込)

坂本龍馬編
定価
300円(税込)

問い合わせ先　九州印刷株式会社　〒852-8103 長崎市緑町4番5号
TEL:095-846-6844　FAX:095-846-6845　E-mail:kyushu.p@ymt.bbiq.jp

日本聖書協会(直営)
キリスト教書店ハレルヤ
〒862-0971 熊本市大江4-20-23
TEL 096-372-3503（FAX共用）
E-mail:k-haleruya@bible.or.jp

映画紹介

『神々と男たち』(DES HOMMES ET DES DIEUX)

マジックアワー/IMJエンタテインメント
2010年 フランス

山川欣也（やまかわきんや）

2013年初頭アルジェリアで起こったイスラム武装勢力による人質殺人事件が、北西アフリカ地域の逼迫した政治的混乱状況をあらためて浮き彫りにしました。今回取り上げる映画は、15年ほど前にアルジェリアで実際に起こった事件を題材にした『神々と男たち』です。

描かれる事件が起こるまでのアルジェリアの経緯については、紙幅の関係で詳細はおき、状況だけを簡単に述べておくと、1962年フランスから独立後、二転三転した後、イスラム原理主義的な小連合集団という、雑多なイスラム武装集団（GIA: Le Groupe Islamique Armé）と、軍や警察などの政府機関との対立が激化し内戦状態となり、当時、体制側とみなされる組織や人物のみならず、外国人や一般人までをも対象としたGIAの無差別なテロが頻発していました。

舞台は小さな村、チビリヌにあるトラピスト会の修道院（アトラスのノートルダム修道院）で、時は1996年3月26日、雪の深夜、武装した男たちによって七人の修道士が誘拐される事件が起きた。結末は、5月23日の犯行側の修道士殺害声明と、30日アルジェリア政府が七人の修道士の遺体（頭部だけらしい）をメディア近くの路上で発見したと発表し終わりますが、誘拐されてから虐殺までの具体的な状況は今日でも明らかではなく、本作品も疑問を持っています。映画は、おおよそこの誘拐される夜までの日々を描いています。

村の人々はイスラム教徒で、修道院は彼らの信仰の場所ではありませんでした。しかし、修道士たちと村人たちは互いの信仰を尊重し合い、日常生活でも支え合いつつ暮らしていた。医師の資格を持つ修道士が村人たちの診療を行うだけでなく、修道士たちは村人たちが抱える様々な問題にアドバイスすることや、悩みを聞いてあげるカウンセラー的な役割をも持っていました。テロの脅威が村の近隣にまで及び、修道士たちの間にも不安が広がり始め、退去した方が良いのではといった考えもでてきます。軍と警察は修道士たちの警護を申し出、また帰国命令も出ますが、修道院長はこれを断ります。修道院長は修道士たちに問います、「なぜ我々はここに遣わされたのか」、「(苦しむ) 人々とともにあるためではないか」と。そして、各人これを考えて行動しようということになりますが、「発つことは死ぬこと」、「良き羊飼いは狼に襲われても羊たちを見捨てない」という言葉は相当重く受け止められます。修道院長は、一度は自分の姿勢に揺るぎはないと決意しますが、全員が留まることを決めた時には、毅然たる態度をみせていても、これで良かったのかと懊悩します。

修道士たちは、異教徒、異邦人としてテロの対象とされながらも、武装集団側負傷者の手当てをします（作品内で十把一絡げにテロリストを描いていません)。これが、テロリストを匿っているのではないかと、アルジェリア軍の疑惑を招きます。こうして、イスラム武装集団だけでなく、アルジェリア軍の脅威にも立ち向かわねばならなくなります。修道院の上を低空で軍のヘリコプターが旋回し、その轟音に抗するかのように、彼らが見上げて肩を寄せ合い、聖歌を合唱するシーンはほぼ唯一のコメディ・リリーフになっています。そして、修道院へ来客があり、記念写真を撮るのですが、小津映画的には不安に駆られるシーンです。写真はその時間に生きたものたちを止めることに他ならないからです。彼らが「思い」を一つにしたあと、いわゆる「最後の晩餐」となります。彼らの顔が、一人ずつ、少しずつクローズアップされ、その夜、……。

信仰を生きつつ、死ぬために死を選ぶのではなく、生きることで死をみつめようとする、勇気というかその潔さに圧倒されます。静謐な修道院における修道士たちの世界には、ある意味、ただごとではない日常がありました。

(現代英語学科教授／表象文化論)

2012年度　チャペルアワー等の記録

チャペルアワーは　毎週水曜日　午後12：40～1：00

(春学期)

回	月　日	奨　励　題	聖　　書	奨　　励　　者
宗教オリテ	4月4日	もとめなさい	マタイ 7. 7-8	小西　哲郎　宗教主任
1	4月11日	生きてる 生きてく	詩編 100	藤井　清邦　牧師（長崎古町教会）
2	4月18日	暖かいまなざし	マタイ 25. 34-40	金　珍　熙　牧師（長崎馬町教会）
3	4月25日	仕えるということ	マルコ 10. 35-45	大薮　朝祥　牧師（長崎飽之浦教会）
4	5月2日	死に支配された人間の心	マルコ 3. 1-6	福田　英樹　牧師（長崎教会）
5	5月9日	恐れから平安へ	マルコ 6. 45-52	高江洲　伸子　牧師（長崎めぐみ教会）
6	5月23日	どんなことでも,思い煩うのはやめなさい	フィリピ 4. 4-7	濱田　道明　牧師（ルーテル長崎教会）
7	5月30日	すべてのひとをひとつに	創世記 11. 1-9	小西　哲郎　宗教主任
8	6月6日	助けて下さる神様	イザヤ 41. 10	梁　正善　講師
9	6月13日	あなたには価値がある	マタイ 8. 1-4	水城　秀明　牧師（ナザレン長崎教会）
10	6月20日	総　和	エフェソ 4. 16	竹内　款一　牧師（長崎銀屋町教会）
11	6月27日	星に願いを	マタイ 7. 7-8	高橋　勇造　理事
12	7月4日	その日の苦労は,その日だけで十分である	マタイ 6. 25-34	栗山　尚典　牧師（長崎平和記念教会）
13	7月11日	慰めに満ちた神	2コリント 1. 3-7	坂田　ひとみ　牧師（インマヌエル長崎教会）
14	7月18日	くるしみにあずかる	フィリピ 3. 8-12	小西　哲郎　宗教主任

(秋学期)

回	月　日	奨　励　題	聖　　書	奨　　励　　者
1	10月3日	初めに,　神は	創世記1. 1-5	藤井　清邦　牧師（長崎古町教会）
2	10月10日	善いものに従う	3ヨハネ 1. 11	金　珍　熙　牧師（長崎馬町教会）
3	10月17日	あなたたちは地の塩,世の光	マタイ 5. 13-16	石川　昭仁　学長
4	10月24日	あなたはどこを向いて生きるのか	マルコ 2. 5-12	福田　英樹　牧師（長崎教会）
5	11月7日	キリストの招き	ヨハネ 10. 7-18	栗山　尚典　牧師（長崎平和記念教会）
6	11月14日	静かなとき	箴言 11. 12	高橋　勇造　理事
7	11月21日	揺るがない人生の土台	マタイ 7. 24-27	水城　秀明　牧師（ナザレン長崎教会）
8	11月28日	キリスト教との出合い	伝道の書3.11, ヨハネ15.16	合田　政次　長崎大学教授
9	12月5日	わたしたちの思いを超えている	イザヤ 55. 8-13	竹内　款一　牧師（長崎銀屋町教会）
10	12月12日	わたしもあなたを罪に定めない	ヨハネ 8. 1-11	堀尾　憲孝　司祭（長崎聖三一教会）
クリスマス	12月19日	クリスマス・メッセージ	ルカ 1. 38	小西　哲郎　宗教主任
11	1月9日	予言の成就	マタイ 2. 13-23	大薮　朝祥　牧師（長崎飽之浦教会）
12	1月16日	人はパンだけで生きるものではない	マタイ 4. 1-11	坂田　ひとみ　牧師（インマヌエル長崎教会）
13	1月23日	放蕩息子の父	ルカ 15. 11-24	高江洲　伸子　牧師（長崎めぐみ教会）
14	1月25日	思い悩むな	マタイ 6. 25-34	藤井　清邦　牧師（長崎古町教会）

編集後記

『チャペル通信』第22号をおとどけします。ご寄稿くださったみなさまに感謝もうしあげます。

さて第30代米国大統領のクーリッジ（John Calvin Coolidge, Jr.）は「この世で『やりつづけること』（persistence）にまさるものはない」といっています。なんでもやりはじめるのは、ある意味でたやすいことですが、それを継続するとなると大変です。しかし、そのやりつづけたことが中心となって、学校も社会も人生もかたちづくられていくのでしょう。この小冊子を年に1号発行しつつおもいます。（こにし・てつろう）